



緊張した表情で卒業式に臨む松戸南高の卒業生＝松戸市紙敷

克服を校登不 手に証書業卒

松戸南高校・三部制定時制課程

友人や教諭が後押し

松戸市紙敷の県立松戸南高校（平本武男校長）に設置されている午前、午後、夜間の三部制定時制課程が、初めての卒業式を迎えた。卒業生55人の約7割が中学では不登校を経験しているが、同校で学校の楽しさを知り、3年間で卒業証書を手にした。同じ体験を持つ友人や、話をきいてくれる先生が後押ししたという。（園田二郎）

精勤賞の生徒も

卒業式は、同校の全日制と一緒に行われた。鈴木祐弘副校長は「緊張をしているけれど、自信のある、いい顔をしているなあ」と感慨深げだった。3年前の入学式。「三部制の生徒はほとんどが下向き、全日制と一緒に式をするのはどうなのかという意見も出た」ほどだったからだ。卒業生のうち38人が中学校の時、年間30日以上も欠席している。小学校から不登校の生徒もいた。多くは、いじめがきっかけだった。

同校では、生徒たちをしからず、話を聞き、声をかけることに徹した。「授業の合間や廊下ですれ違う時に一人ひとりに話しかけた」と教務主任の吉永良治教諭。生徒自身も選ぶ相談相手になる「パーソナルチューター」（第2担任）制度もあった。授業も多くて30人、少ない場合は2人という少人数。黒板の前に教師が立って話すのではなく、「生徒の中に入り込む授業」を目指した。徐々に生徒たちは心を開くようになった。

「それでも、一番良かったのは「同じ不登校を体験してきた仲間がいる」という安心感ではなかったのか」と、鈴木副校長はいう。午後部の日色日向子さんは大学へ進学する。小学校から不登校だったが、高校の欠席は1日で精勤賞。「一人で電車も乗れず、買い物にも行けなかった。好きなバンドを聞きに行こうと友達に強く誘われたのがきっかけで、外へも出られて、バイトもできるようになった」

短大に進学する、午後部の大野美和さんは「中学では体が弱くて入退院を繰り返していた。ここでは、みんなが暗い体験をしているので他人を思いやれる子が多い。授業でも、先生たちから、『わかる？』と聞いてくれる」。不登校の生徒が学校に通えるようになったという評判は広がり、同校には今年度、70組の保護者や中学生が見学に訪れた。入試で、これまで定員割れしてきた夜間部が初めて定員を越えた。